經濟論叢

第142巻　第2・3号

オーストリア経済思想史研究の課題と方法……八　木　紀一郎　1
W. A. ルイスの世界システム論……小野塚　佳　光　12
社会的欲求の充足と財政組織……山　田　浩　貴　31
ターンパイク・モデルの初期調整プロセス……長　沢　克　重　49
技術革新と雇用……ジャンカルロ・ノンニス　70
戦後日本電機企業の海外進出……薛　文　肇　93

書　評

向　寿一著「世界マネー循環と多国籍銀行」…小　倉　明　浩　117

経済学会記事

昭和63年8・9月

京都大學經濟學會

オーストリア経済思想史研究の課題と方法

八　木　紀　一　郎

はじめに

今年（1988年）4月に刊行された拙著『オーストリア経済思想史研究——中欧帝国と経済学者——』（名古屋大学出版会）は，その後，いくつかの経済学史研究グループで書評会の対象になるという光栄に浴した。以下の文章は，その一つに出席するさいに，資料の事前提出を求められて8月末に執筆したものに，ごく一部加筆したものである。そのなかで私は，『思想』同年6月号に掲載された杉山光信氏の書評への感想からはじめて，私の研究の課題と視角，そして残された問題について説明している。論説というよりは，弁明というべき性格の文章であるが，関心をもっていただける読者もいるかもしれないと考え，公表する次第である。

I

『思想』1988年6月号に掲載された杉山光信氏の書評[1]は，『研究』がオー

1) 本稿を『論叢』編集委員会に提出する以前にあらわれていた書評としては，他に『日本経済新聞』1988年5月8号（根岸隆氏筆），『エコノミスト』同10月25日号（美濃口武雄氏筆）があった。その後，年を越した1989年になると松尾野裕氏『立教経済学研究』第42巻3号と井上琢智氏『経済学論究』（関西学院大学）第42巻4号の二つが出た。前者は，「経済学の社会史的文脈」と題してヴェーバーを出発点としたドイツ経済思想史研究者の立場からのもので，本「弁明」のIIからIVまでと共通する批評が述べられている。後者は，著書『ジェヴォンズの思想と経済学——科学者から経済学者へ——』（日本評論社：1987年）をもつ同世代の経済学史研究者によるもので，「たとえ理論史的アプローチを採らないとはいえ，メンガーの経済理論や思想のコアがどのようなものであったかを明示すべきであった」というのは，たしかにもっともな批評である。（ついでながら，この機会を借りて，井上氏著書への『エコノミスト』1988年4月12日号の拙評で，「厳密」「精密」という氏のキー・タームを取り違えて使用したことをお詫びしておきたい。）さらに『みすず』第335号（1989年1月号）の「1988年読書アンケート」には田中真晴氏の好意的言及とともに，杉山氏の追加的コメントも収録されている。

ストリア学派の「自由主義」に批判的なスタンスをとっていることを読みとっている。この書評の存在は，本書をオーストリアンの自画自賛的な書と解するような初歩的な誤解から生じる煩労を著者に免れさせてくれるだろう。にもかかわらず，この書評は『研究』をその半面（いうならば，その‘外面’）からとらえたにとどまるという不満を著者に感じさせる。杉山氏の示された御厚情に感謝しつつも，「著者の弁明」はこの書評へのコメントからはじまらざるをえない。

杉山氏は，『研究』を「この学派〔オーストリア学派〕の人びとの社会的基盤をおさえたうえで，課題とした問題をかれらのヴィジョンと関連させて明らかにする思想史」とみなし，とくに20世紀初頭の「組織された資本主義」段階の自由主義としてベーム，ヴィーザーを論じているところに注目している。『研究』第3，4章のなかで採用されているそうした視角への注目は，書評末尾の「ケインズ主義＝リベラリズムと古典的自由主義＝コンサーヴァティズムの二極対立」という杉山氏の現代的問題把握とつながっているのであろう。つまり，メンガーが一貫した自由主義的な経済理論体系（経済政策をも含む）を確立しえず，ベームやヴィーザーが古典的自由主義からの離脱をはかったという本書の指摘に，現在もてはやされはじめている「オーストリア学派の『自由主義』」の神話への批判の意味をよみとられたようである。

たしかに，オーストリア学派＝「金利生活者の経済学」というブハーリンの規定をとりあつかった序章からはじまる本書を，そのように読むことは不可能ではない。また，私自身，そうした——オーストリア学派の‘自由主義’の実態を明らかにすることによって，現代の「新自由主義」熱に水をかけようという——批判的な意図をいだいたことがなかったわけでもない。しかし，10年近くこの研究を続けてきたなかでは，問題は対象と融合してより内面的になっている。そのうえ，最近のオーストリアンの主張には，理論的にも思想的にも，私はかなり共感する部分もあり，単純に現時点の政策的対立の構図の中に位置づけることで，その学問的な評価にかえうるとは考えていない。したがって，

『研究』を，思想史研究の姿をとった現代「新自由主義」批判とみなすことは，私が当初懸念していた誤解の正反対の極端に『研究』をおいやることであり，著者としては，何か多くのものを切り捨てられたような気になる。オーストリアンへの応答は，私にとっても，それなりに内面的なアクチュアリティをもった課題であったのである。

II

まず，「思想史」ということについて。

「まえがき」で私は，『研究』が「思想史型」の経済学史研究であるとことわった。しかし，「思想史」と一口にいっても，さらに様々なタイプがある。著者自身のイメージでは，『研究』は‘社会思想史’というよりは‘intellectual history’である。‘社会思想史’ではないというのは，扱われている対象が革新にせよ保守にせよ何らかの社会的実践をさししめす‘社会思想’ではないということ，また，‘社会思想史’的分析において必須である（と私の考える）社会経済史的背景と政策・思想的対立についての堅固な分析のうえに執筆されたものではないということ，の二つの意味においてである。つまり，私のイメージでは，‘社会思想史’というのは，その対象の面においても，手法の面においても‘外面’つまり‘社会’志向的であるが，‘intellectual history’（「精神史」とか「知性史」というように訳されるがどうもピッタリこない）の方は，その対極で，つねに‘自己’を問題にしている人間をその‘自己’イメージからとらえるという内向的関心を含むものである。

もちろん，杉山氏の書評がとりあげたように，『研究』に「社会思想史」的側面がないわけではない。だが，「まえがき」でことわっているように，『研究』はこの側面からいえば，アド・ホクにありあわせの知識をつなぎあわせて分析にかえたにすぎず，決定的に脆弱である。とくに著者は，オーストリアの経済政策あるいは財政政策の展開についての十分な知識なしに，『研究』を執筆した。政策問題にふれるたびに，著者は，ヨシの髄から天井を覗くような作

業をしているのではないか，という感じをいだいた。とくに，将来出現すべき“オーストリア経済政策思想史”にとっては，『研究』で論じられたことは，トルソー以下の断片的エピソードにすぎないであろう。

しかし，ここで弁明しておきたいことは，経済学史のような理論的学問の歴史的研究の場合には，たとえ先のようないわば‘環境主義’的視角を否定しないまでも，学問自体の発展の‘相対的な自律性’を無視することはできない，ということである。それは，「科学史」の近年のジャーゴンでいえば，一定の‘パラダイム’の成立はその枠内での発展を自律的にうみだすとか，社会と科学のあいだに存在する「科学者集団の社会学」が必要だ，というようなことになる。『研究』はこの点ではやや整備されているといってよいかもしれない。‘パラダイム’にあたるものとして，メンガーによってうちたてられた‘主観主義’（あるいは，「方法論的個人主義」）があり，また，社会と経済学のあいだの中間媒体としては，オーストリアの「大学」がおかれているからである。本書の序章に利用した論文を読んだある研究者は，私の立場を「洗練された環境主義」‘refined environmentarism’と名付けたが，私はそれが適切な表現であると考えている[2)]。

III

『研究』の実体は論文集であって，本書のタイトルを英訳するとすれば，それは Studies in the History of Austrian Economic Thought になると思う。それでもテーマらしきものが存在しないわけではない。私自身の考えでは，オーストリア学派（シュンペーターを含む）の社会経済史というべき，いわば‘外面的’なテーマとともに，メンガーによってうちたてられた‘主観主義’の発展を辿るという，いわば‘内面的’なテーマが同時に存在している。前者

2) やや卑俗な言い方をすれば，‘intellectual history’のいま一つの意味は‘インテリ’という人種の歴史ということである。彼らは，そのそれぞれのタイプごとに独得の人間関係と精神世界をつくりだして，それをいわば‘棲息環境’としている。彼らへの「環境主義」への適用には，つねに一工夫が必要である。

の展望をおこなったのが序章であるが，後者の方も第1章のヴェーバー論でその緒が与えられている。第2章のメンガー論も‘内面的’テーマの系列に属する。第3章のベーム＝バヴェルク論，第4章のヴィーザー論は‘外面的’傾向が勝っている。しかし，その内外両面にわたるテーマは，オーストリア学派における〈経済人〉の像という問題でクロスしているのであって，それを介して両テーマはつねに相互に浸潤しあっている。杉山氏の書評に対する私の不満は，‘内面的’なテーマの系列と切り離して‘外面的’なテーマの系列をとりだしたことにある。

さらに，第2部にはいると，20世紀初頭の時点での資本主義の理論的解明という第3のテーマが加わる。とくに第7章においては，先の2つのテーマが第3のテーマのなかに組み込まれている。私は，この章でシュンペーター，ミーゼス，ヒルファーディングが貨幣的で動態的な理論を樹立しようとしたことをとりあげた。しかし，第7章のケインズをもちだしての尻切れトンボ風のまとめ方にみられるように，この第3のテーマは本書においては理論的には完結していない。もちろん，完結していないからといって価値がないと考えているわけではない。著者の考えによれば，先に‘内面的’テーマとしてあげた‘主観主義’あるいは‘行為’の理論は，経済機構のなかでは‘時間のなかで進行する過程’に注目するという視点に対応する。したがって，著者は『研究』最終章の末尾に次のような期待をかきつけたとき，第7章で物語られたような理論的努力が，ふたたび再開されるべきであると確認しているのである：

「社会哲学の高みにとどまる場合と異なり，理論の世界において予想されるのは混戦である。経済の〈過程〉としての理解は，価値のあるものであるが，それは必ずしもミーゼス流のリバータリアニズムと結びつくとは限らない。オーストリアン的な問題提起がケインジアンやマルクシアンに役立つこともありうるし，理論の発展次第では，シュンペーター的なアイデアや制度学派的枠組みの復活の支えとなることもありうるであろう。」(258ページ)

IV

1. 既に述べたことだが，オーストリアの経済政策あるいは財政政策の展開についての十分な知識なしに本書は執筆されている。その結果，とくに，第3章のベーム財政論の説明は，いささかアド・ホクなものになってしまっている。
2. ベーム論，ヴィーザー論において「自由主義」の変貌は論じられているが，その出発点になる19世紀半ばのオーストリアの「古・自由主義」の像は描かれていない。メンガーの「自由主義」も，こうした方面のイメージがなければ十分に理解できないであろう。
3. 本書は，帝国の官僚層を背景とする「旧世代」と比べて，20世紀初頭の「新世代」は例らかのかたちで「企業家」層と関係しているとみている。しかし，それがどの程度はっきりとした差異としていえるのかどうか。また，20世紀初頭の経済発展のなかで「企業家」がどのような役割を果たしていたのか，本書は独自の見解を提出できないでいる。

この3つの欠陥のうち，1と3については，まずは歴史家の作業の成果がみのることを待ちたい。この領域の研究は，ハプスブルク史研究のさかんな欧米でも，それほど高い水準に達しているとは思えない。しかし，わが国でも昨年になってようやく，小人数ながらハプスブルク史の研究者の連絡組織[3]が成立し，経済史研究者の仕事も進展をみせているので，事情は次第に好転するであろう。私の力である程度改善可能と考えられるのは，2についてである。というのは，私は現在，ドイツ人自由派の代議士であった，メンガー3兄弟の長兄マックスの政治活動について論文を執筆することを予定しているからである。彼は，当初はシュルツェ＝デーリッチ式互助組合を唱道することから政治生活を開始し，議会における経済問題・財政問題の権威となった人物であり，多数

3) この研究会（「ハプスブルク史研究会」事務局 大阪教育大学大津留厚研究室）には，御園生真氏，佐藤勝則氏ら経済史研究者も加わっている。

のパンフレットと議会演説を残している。したがって，この作業は2だけでなく，1の欠陥をも多少補いうるかもしれない。

この‘外面的’テーマにかかわって私がもっとも恐れているのは，19世紀末から20世紀初頭の経済について，1873年以降の「大不況」，そして20世紀初頭の「みせかけの発展」というイメージが崩壊することである。私はオーストリアについてはこのイメージは多分まだしばらくは維持されると思うが，ドイツについては，この「世紀末大不況」イメージは既に崩壊しかけている。したがって，オーストリア経済は目立たないながらも，それなりに健全な発展をとげていたということになれば，本書の記述の多くはイメージによりかかった弱点が暴露されることになるであろう。

V

マックス・ヴェーバーは，メンガーの限界効用理論を目的合理的な行為の理論として再構成した。こうしたメンガー＝ヴェーバー関係（主観主義経済学＝行為の理論）のもちうる領域のなかでオーストリア学派の〈経済人〉を捕捉するのが，第2の‘内面的’テーマである。このテーマは，ベームやヴィーザーではやや影にかくれるものの，シュンペーターの反逆，ミーゼスの再興を経て，遠く現代の‘オーストリアン’の動向の展望にまでこだましている。

第1章のヴェーバー論は，1979年に公表した論文を簡略にしたもので，『研究』のなかではもっとも時期的に古い。『研究』の構想や配列を考えるにあたって，私ははじめは，これを含めず，メンガーから論じはじめるつもりであったが，どうしても思うように筆が進まなかった。このヴェーバー論を冒頭にもってきて，私はようやく自分の気持が落ち着くのを感じた。やはり，メンガーをヴェーバーによって包んだことが，この『研究』のパン種であったのである[4]。

4) 拙著をヴェーバー論としてみるならば，わが国の‘ヴェーベリアン’の多くは，ヴェーバーを〈行為〉理論，あるいは，メンガーにはじまるラインの中でとらえることに反対であるかもし↗

この‘内面的’テーマにかかわって，私が『研究』の最大の欠陥と考えているのは，第2部において本格的なミーゼス論を提供しえなかったことである。ミーゼスは，オーストリア学派の‘主観主義’を心理主義から行為理論に転轍し，一種のファンダメンタリスト的立場を確立した，オーストリアンのいわば‘中興の祖’である。第2部の主人公がシュンペーターになったのは，「資本主義過程」の理論という第3のテーマにおいてシュンペーターがミーゼスに先行した結果ではあるが，‘内面的’テーマの系列においては，主人公はミーゼスになるべきであった。

私は，第5章でミーゼスに数ページを割くことで体裁をとりつくろったが，時間をかけてミーゼスに沈潜することができなかったので，私の筆はまだミーゼスの外面をなぞっているにすぎない感じがする。私がミーゼスを解釈するさいに手がかりとしたのは，カーズナーらの現代オーストリアンのミーゼス観であるが，それにしたがうことは，後期のミーゼスを1910年代，20年代にまで逆投影する危険をおかすことでもある。また，私はミーゼスの「プラクシオロジー」を社会性をもたない形式主義に陥っていると批判し，ミーゼスの行為主体はシュンペーターに比べても人間的実質に乏しいとしている。しかし私は，ミーゼスがどのような考えで彼の形式主義的な立場を社会学および歴史学と結びつけているのか，その脈絡がまだ明瞭に摑めていない。

次の文章は，第5章の末尾である：

> 「ミーゼスはたしかに，社会主義の経済の問題を数理モデルではなく，社会科学的に論じることを要求したが，彼自身の回答は資本主義における経済行動の主観的合理性を語るにとどまり，所有および利害の構造のもとでの各経済主体の行為の諸連関を認識しうるようなものにはならなかった。ミーゼスは，社会科学を‘プラクシオロジー’に純化してしまうことによ

れない。しかし，私は拙著第2章のヴェーバー論で，私がヴェーバーの業績の核心と考えるものを尽しえたと考えている。といっても，このようなヴェーバー観は，T．パーソンズ（『社会的行為の構造』1937年）や馬場啓之助（『経済学方法論』春秋社1956年）にもみられるもので，それほど新奇なものではないであろう。

って，貨幣的経済計算がおこなわれる市場を残して社会の実体を消去してしまった。これは，ハプスブルク帝国という，かつて自己を守ってくれた枠組みをうしない，真正のコスモポリタンとなったオーストリア学派にふさわしい経済観である。」(143ページ)

この総括的な評言の前半は，第10章の学界展望で現代オーストリアンに与えた評価（「現代オーストリアンは，たしかに現実の〈市場過程〉についての有効なヴィジョンを持ってはいるが，その〈過程〉を支える生産および所有の〈構造〉をも包括した全体的な理論を生みだしてはいない。」258ページ）に対応する。また，後半は，ハプスブルク帝国に依存した「自由主義者」としてのオールダー・オーストリアンズから市場経済万能のヤンガー・オーストリアンズへの転換の展望を与えるはずのものである。しかし，私はこの文章をどれだけの確信をもって書いたのだろうか？

VI

第3の現代資本主義論にかんしては，その登場人物は，ミーゼス，シュンペーターとヒルファーディング（またはバウアー）である。『研究』の叙述は，この3人（あるいは4人）の1905年から1910—1912年の3著作にいたるまでの歩みに焦点を絞っている。私は，先にこの第3のテーマに関しては，問題は理論的には未解決であると述べたが，それはこうした時期的な限定にも起因している。ミーゼスの『貨幣及び流通手段の理論』は消費的個人の視点からの貯蓄決定に基礎をおいたもので，オーストリアン・ファンダメンタリストとしてはいまだ過渡的な著作である。他方，シュンペーターの『経済発展の理論』[5]は，資本の蓄積と所有を軽視した〈革新〉の一面的強調に陥っている。この両者に比較すると，ヒルファーディングの『金融資本論』は，社会の再生産のなかに

5) シュンペーター『経済発展の理論』に関して。179ページに登場する「信用インフレ」「信用デフレ」の議論は，初版にはみられない。したがって，1912年段階の論理としてこのように述べてよいかどうかは，疑問が残る。

〈信用〉や〈蓄積〉を位置づける健全さをもっていたが，「社会的流通価値」論にみられる彼の新機軸も貨幣資本の蓄積の理論と結合しえなかった。要するに，『研究』第2部でとりあげた第一次大戦前夜の3著作は，金融資産の蓄積を含む資本の蓄積過程の総体的解明としては欠けるところがあったのである。

ここで提出されはしたが，未解決にとどまった問題を理論史的に研究しようとすれば，ヴィクセルからケインズへという流れをハイエクを交えながらフォロウすることになるであろう。しかし，残念なことに，私にはそうした作業にのりだすことのできる状態にはない。むしろ，私は『研究』では僅かにヒルファーディングを通じて一瞬姿をあらわしたにすぎないマルクスをベースにして理論的に追求してみたいと考えている。

ミーゼスの流れは，その後，経済過程の総体的把握の追求には意識的に背を向けたが，現代オーストリアンの中にはそうした方向に乗り出すものも生まれている。シュンペーターの流れも，金融市場の理論を構築しえなかったが，最近のシュンペーター・リヴァイバルの中には H. P. ミンスキーのような金融理論家の名前も見出される[6]。そして，マルクス経済学においても，ドクマティズムや独善的な閉鎖性からの脱皮の動きがようやく感じられるようになった。私の考えでは，この3つの流れは，いずれも，経済を〈均衡〉ではなく時間のなかでの〈過程〉とみなす点に共通性をもっている。したがって，1910—12年の3著作に姿をとった3つの流れが，1930年代以降のケインズ革命をへて，理論的に一新した姿で再び登場したものをあらためて検討したいというのが，私が現在夢想していることである。

---

6) 1986年に創設された International Joseph A. Schumpeter Society は既に2回の国際会議を成功させ，「発展の経済学」'Evolutionary Economics' という目標を掲げた野心的な経済学者のフォーラムとしての地位を確立したようである。わが国では，シュンペーター『経済発展の理論』を訳された塩野谷祐一氏が熱心にこの学会をもりたてられている。1986年9月のアウグスブルク創立大会でのレポートは，Horst Hanusch ed., *Evolutionary Economics. Applications of Schumpeter's ideas*, Cambridge Univ. Press, 1988 として刊行された。1988年5月のシエナ会議は，"Evolution of Technology and Market Structure in an International Context" という全体テーマでおこなわれたが，シュンペーター理論に即した一般的セッションもあり，R. M. Goodwin や H. P. Minsky らが報告をおこなっている。

VII

『研究』は，慎重に経済思想史の世界に自己限定してはいるものの，近年の‘オーストリア学派’復活の波のなかでは，経済理論の面においても思想の面においても，渦中に投じられた一書という性格ももたざるをえないだろう。この点が，著者の危惧するところであるとともに，自負するところであった。したがって，著者として気になるのは，たんに経済学史の専門的研究者として研究上の遺漏がないかどうか，ということだけではない。近年の‘オーストリアン’の主張にたいするスタンスのとりかたにおいて本書に誤りがないかどうか，またそうした評価を十分な根拠をもって下しえたかどうか，ということもそうである。上記では，書評会への資料の求めに応じて，そうした著者としての不安をさらけだしながら，『研究』の視点，テーマ，そして今後の課題等について説明した。